
浮く雲と風と

宮崎浮雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮く雲と風と

【Nコード】

N1225B

【作者名】

宮崎浮雲

【あらすじ】

自分を浮雲のような不道德なやつと蔑むトモ。愛さずにはいられないきもちと、愛が失われてしまうのではという恐怖にとらわれ一途になれない。純粋な恋と、触れられないジレンマ、隣の芝生の見せ掛けの青さに落ちる心、一度はあきらめた愛するところを取りもどせた矢先の裏切り、男性不信の中に見つけた彼女との恋、束縛と快樂へのジレンマ、自分の幸せをつかもうとする心、そんな心を許せない心、そして、やっと訪れた平穏な恋。そんな中でも自分を浮雲にしてしまう風との一瞬のできごと。すべてはたった一通のメ

ー
ル
か
ら
始
ま
っ
た
。

流れる雲

私の人生は浮雲のような気がする。

どこに行くのかもわからない、流されもして、流れもする。

私は誰も愛していないのか・・・。

いや、愛したい・・・。心から愛したい。

ただ、怖いんだ。そして、欲張りなんだ。

風が私の頬をたたく、もっとしっかりしなさい、と。

私は歩く、たった一人で

すれ違う人はみんな知らない、私が何者で、なぜすれ違ったのか

そして私も彼らが何者で、何のためにいま私とすれ違ったのか

知らない。

博多の空は青くて、でも、冷たかった。

私はそんな空を眺めながら煙に体を包まれ、そして、私も煙を吐き出していた。

吐く息は白く、うつろだった。

灰色の世界・・・。

タバコのせいじゃない。わたしの心のせいだ。

どうしてだろう、点と点の関係のようなもの。

私たちの間に愛なんてこれっぽっちもない。

でも、私はあなたの子供ならほしいかも・・・と、ときどき思っている。

わかってる。愛し合ってなんかない。

ただ一瞬の快楽を共有するだけ。むしろ、あなたの快楽に付き合うだけといったほうがいいのだろう・・・

周りの目からすれば・・・。

私は周りの目から見れば哀れな女なんだろうきつと・・・。

そんなことを思いながらタバコの煙を吐き出す。

この姿を彼に見られたら・・・。

彼はタバコをすう女が嫌いだといってる。

きつと見られたら、

もう二度と会わないといわれるか、やめろよそんなこと、といわれるに違いない。

愛なんて必要なのか？？

私に必要なのはただの快樂だけじゃないのか？？

私はそれがために男を求めてるんじゃないのか、と

考えてしまう……。でも、その反面、それだけじゃあ納得してない部分もある。

結局は心も体も満たされたいとおもっているんだ……。

そんなことを感じだ瞬間、私はタバコをひねりつぶした。

私にそんなこと許されるわけがない。

私はまたあてもなく歩き出した。

私は今まで罪深いことばかりを繰り返している。

相当たちの悪い罪だ。

決して刑事罰に問われることはなくても、一般社会のの倫理に反している

そんな私の願いを神様は聞き届けてはくれないし、それじゃあ世の中不公平ってもんだ

「今日は博多に泊りになった。」

ただ、それだけのシンプルなメール。

用件だけのメール。

それだけしかよこさない男に私はどうして自分の時間を割いてしま
うのか。

不満がたまりにたまってた。

愛されていないなんて100も承知だ、だけど、女としてこの体に手
をつけられている以上

それなりの扱いをされたかった。

女の心理としては当然というところだ。

その日だけでもいい、私をある種、特別な場所においてほしいと思
うのは当然のことだ。

愛してるなんて言葉はいらない、行動で示してほしい。

今夜あなたと一瞬の快楽を共有する私のために、今日だけでも私の
ために何かしてほしい。

そう思うのはいけないことなのか。と、思い不満がたまる。

でも、男のほうの心理としては、気持ち良い思いできてるんだから

これ以上、何の不満がある。というところだろう……。

わかってるよ、本気で愛してない女には快樂意外に何も与えないってことぐらい。

でも、女はそれじゃあ気がすまないんだ。それが本能的な感情で、抑えられないんだ。

思い切ってぶちまけてみた。

でも、彼はわかってくれなかったんだろう。

あのメールからして。

く博多なら会ってあげてもいいけど、く

初めて上から目線でメールを打った。

きつと彼のことだ、むっとしてるに違いない。

私はもう、そんなこと、どうでもよかった。

そういう関係の女としてはかなり失格なんだろうけど、もうどうでもよかった。

ただ、証明してほしかったんだ。

俺の中にお前はいるんだよ、って。

愛してるとかそんな言葉は要らない、ただ、私のいないところで私のために時間を割いてほしかったんだ。一瞬でもいいから。

あなたの中に私はちゃんと認知されてるって証明してほしかったんだ。

それだけ、私にとってあなたは

遠くて、つかめない存在なんです。

そんなあなたに体を託して、快楽を感じて、そして、現実に戻される。

残酷だよ・・・。

でも、あなたに会いたいんだ、会って、あなたと快楽をともにしたい。

何故かはわからない・・・。

ほかに良い男はたくさんいるのに、現に私を大切にしてくれてる人はほかにもいるのに・・・。

でも、そう思ってしまうんだ。

「用事があるから、会えるかどうかはわからない」

「10時半までに会えそうだったらメールして、連絡なかったらもう帰るから」

彼は私には何もしてくれない。

私の体を求めるだけ、なら、私の都合に合わせられないならもう帰ろう。

私を大切にしてくれる人のもとへ、でも、なんだか切ない。

朝から続いていた吐き気もだいぶおさまって、私はなにか口に入れようと喫茶店に入った。

「わからないから今日はやめとこう。ごめんな」

謝ってるようには聞こえなかった。

めんどくさい。ただその一言を感じるだけだった。

私どうしちゃったんだろう・・・。

そんな、めんどくさい女じゃなかったのに。

やっぱり・・・。

いや違う！！そんなんじゃない。こんなことでおぼれたら私の負け

じゃない。

ああ……。私はいったいどうしたんだろう

彼がほしい……。ただただその気持ちが募っていく。

彼がほしい……。

気がついたら友達に電話をしてた。

そして、出た結論は

「やっぱり会いたって言ったら困る？」

私はやっぱり一瞬の喜びを手に入れたくなったんだ。

彼は私の部屋に入ってくるなり私の体の手をつけた。

どうして、私はこの人に勝てないの??

どうしてよ!!

私は心の中で叫んでる気がした。

手のひらを返したように駄々をこねる私に彼は困惑した。

そして、私は彼にうやむやにやり過ぎされ、部屋に独りぼっちにされた。

倦怠感に包まれながら私は天井を眺めた。

私ってどうしてこうも浮雲のように流れっぱなしなんだろう。

そんな時、あの忌まわしい記憶がよみがえってきた。

私が、こんな女であることを許してしまうような心に成り果てしまった出来事を・・・。

あんなことがあれば愛なんてなくてもいいやっておもうわ・・・。

タバコが吸いたい、でもここは禁煙。

風呂に入ることにした。

あの時はこんなことになるなんて思っても見なかっただろうになあ
くとおもって

湯船の中で眼を瞑る。

青空、白とオレンジ

私の初めての付き合った人は年下だった。

もとから、年上に憧れがある私にとって、初めての彼が年下だということは自分でもそうだが、周囲を驚かせた。

だって、最初の彼の印象は年の割りにしっかりしているという印象があつて、頼れる気がしたからだ。

付き合うきっかけは簡単だった。

夜中に交わしていた冗談めかしの一通のメール。

「ジュンみたいな人となら付き合ってもいいかもね」

まんざらでもない気持ちもあつたし、冗談めいた気持ちもあつた。

しかし、彼はこのメールを本気と捉えていたようで

「俺も、トモと付き合いたい。本気で」

と、真剣な返信が返ってきたのだ。

正直言ってとてもあっけない瞬間だった。

中学時代、容姿もそんなによくなく、野暮ったく、それでも彼氏が

ほしいほしいと必死にあがいていて、彼氏ができる瞬間ってのはすごく劇的なんだと思っていた。

そんな私にとってこんな形であっさりと彼氏ができたしまったのはあるいみ期待はずれだった。

それでも、うれしかった。

高校生になって私は変わったんだと、改めて実感した。

私はもう、中学時代のダサい人間じゃない。みんなに根暗だの、ブスだの言われる人間じゃあなくなったんだ。

人生がばら色に見えた瞬間だった。

彼と私の付き合いはいたって学生として健全な付き合いをしていた。

彼と付き合うことになって、はじめての練習帰り、彼は私が出てくるのを待っていてくれていた。

彼と私は同じダンスチームの人間で、知り合ったきっかけもダンスの大会のときだった。

私は黙って彼の元に行って頬を赤らめて、恥ずかしそうにいった言葉は今でも覚えてる。

「わざわざ、ごめんね。」

彼は「いこう。」といって私を駅まで送ってくれた。

初めてだった、男の人と二人っきりで彼氏と彼女という形で外を歩いたのは。

すごく、恥ずかしくて、不自然な感じがして、なんだか幸せだった。

全部が真っ白の明るく何にもない世界に感じられた。

彼は何か必死に話題を作ろうというろと話をしてくれる。

私も時間がたつに連れて緊張もほぐれておしゃべりが多くなる。

もともと二人ともおしゃべりなキャラクター話はとっても盛り上がった。

初めての見送りデートは夏の青い青い空の下、真っ白な心とオレンジ色の空気につつまれて頬を赤らめながら帰る二人で、幸せに包まれてた。

ついに私も誰もがあこがれるポジションにたつことができたんだ。

そんなうれしさが一人になった電車の中でこみ上げていた。

私はもてないんじゃないんだ。もっと自信もっていいんだ。ってかんじられた。

でも、同時に、ごめんって心の中で、彼に謝っていた。

だって、もう私、この体に触れられてるの……。

それは夏も近づく体育祭のあとのバスの中での出来事がはじまりだ

つ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1225b/>

浮く雲と風と

2010年10月9日23時30分発行